

## 第2回 奈良市地産地消基本計画検討委員会 議事内容（要点）

### ▼ 各委員の取り組み内容について（自己紹介を含む）

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 株式会社地域活性局という奈良町の観光案内所、奈良町情報館という施設の2階で地域振興の会社をしている。
- 吉野の過疎地域である川上村の高原地区で契約農家5軒と直営の畑を持っており、そこから野菜を仕入れて、奈良町の飲食店20軒ほどに卸しています。

### ▼ 地産地消の課題について

＜委員：中島 弘子（奈良市農村生活研究グループ）

- 農業従事者が減っている理由に関して、農業機械は年に数えるくらいしか使わないのに、機械代が高すぎるという状況がある。故障すると農業をやめようという方が多い。

＜会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 前回のまとめは各自読んでいただき、異論があれば事務局までご連絡いただきたい。

### ▼ 奈良市地産地消基本計画 基本理念（案）について

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 案①に大和とあるが、大和は奈良県全体のこと。ここには奈良と明確に入れるべき。
- 奈良は日本で一番古くから農業の計画生産を考えていた地域。一番古くから整備されたまちとして、人が物を生産する計画を作るという意味合いをつけた方がいい。
- 1300年祭があったが、米作りも1300回経験している。そういう意味を入れるべき。日本で一番古い農業計画でもいい。古くからの価値観をもとに作っていくという意味で、人をテーマにして作るべき。
- まほろばという言葉が曖昧すぎる。東京では日本料理の食材が店の周りで生産できないが、近畿はそれがうまくできるように食文化と地域の農業がまとまっている。そういった意味が入るといい。
- 農家の後継ぎの人たちは生涯年収がどのくらいあればいいのかという明確な目標を元に作るのであれば、人をテーマにするべき。本来農業が一番地域で人口をストックできる産業。そういう意味でも、古いまちと人をテーマにするのが良い。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- ただ古いのではなく、歴史を重ねて今の計画を作るというイメージ。それで1300年というフレーズはいい。必要なのは人。次の段階の計画で、農業者だけではなく食に関係する人たちの顔がどのくらい見えてどれだけ実際にできるか。

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 企業の経営理念は、会社のトップがこういうことをしたいというもの。今回奈良市が地産地消でこの課題に対してこんな取り組みをするというのが理念になる。こういう方向で奈良市の地産地消を進めるべきだというものを出した上で、どんな言葉を使って表現するかを考えたらいい。

＜会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 食育計画でもキャッチコピーは別に作っていた。「イキイキ元気 奈良市民」というものだったと思う。理念とキャッチフレーズは切り離して考えて、キャッチフレーズの下に書いてある言葉が基本理念になると思う。
- 安心安全という言葉があった方がいい。歴史がどうというのは入れにくい気がするが、キャッチフレーズの下に1300年の歴史や伝統のような意味を付け足すようにすべきか。

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 長浜の事例に「風土と結びついた」とあり、文化が入ってユニークだと思う。
- 食育と地産地消を合わせて考えるのか、別で考えるのかを検討が必要。地産地消で生産・流通・消費にフォーカスを当てるのか、食育も合わせて考えるのか、そこが理念になる。

＜委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- 奈良市はすごく農業が盛んというわけでもない。食育も含めて皆で関われるものにして伝統をつなぐということも入れられたらいい。
- 今後何をしていきたいのかを6ページの右側に提案した。一番上は農業振興。農家が食べていけるように、農家が増えるように、若い人が農業をしたいと思えるようにしたい。奈良らしいものとして、蘇などはシルクロードを渡って奈良に来て、そこから全国に広まった。奈良から発祥したものが多く、奈良にしかないものがなかなかない。
- 2番目はつながる、伝える。顔の見える環境を作っていこう、伝統も伝えていこうという意味。3番目は、産地交流や食べよう、楽しもうという意味を込めたもの。

＜会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 地産地消はどの地域で考えても地域差がそれほどない。奈良の農林畜産物の生産・流通・消費でまちを元気にしていこうということ。理念としては「安全・安心で美味しい奈良の生産・流通・消費で奈良の元気を広げよう」ということ。さらにそこに食育も含めると健康づくりも入る。

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 理念にも階層性がある。企業は利益を上げることや社会貢献をすることが根本だが、サブの理念として個々のオリジナリティが出る。ここでは、表現された地産地消の根本的なことにオリジナリティを加えるものとして、文化や奈良の良さを入れたい。

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 奈良は日本で燃えていない珍しいまち。そういうまちが新しく地産地消計画を作るという意味で何か表現できるものがあつたらいい。
- 奈良が残してきたものに対して人がやっけてきている。観光の面での奈良の魅力は大きいので、そういうまちが地産地消計画を作るという意味を入れられたらいい。

＜委員：尾崎 敦士（旬彩 ひより 代表）

- 私が思う一番の言葉は「感謝」。人ありきで感謝、これは外したくない。食に対して、人に対して、全てに対して感謝ということ。一人で商売をしているわけではないし、生活

をしているわけではないし、させてもらっているような感じ。

⇒委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 奈良町で仕事をしてきて、人に頭を下げることができるようになったと感じる。まちで生かされているように仕事をしているという感覚。日本人の持つ心としては、物事に感謝するということは歴史が紡いできた人間の強さ。そこに日本人らしさがある。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 食は生産から流通・消費までつながっているの、そのつながりに感謝する、食を通じて感謝するということか。人格教育という感覚を出せばいいのではないか。

<委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- 奈良を考えようというワークショップが奈良町でも行われているが、井戸端会議ができるような密な関係をもう一度作っていきたいという思いを若い人たちも皆感じている。

<委員：中島 弘子（奈良市農村生活研究グループ）

- 奈良で生まれ育ったが、家では全てのものを作っていた。綿やお茶など自給自足の生活だった。農家の横のつながり、人と人の関係は、村の中ではまだ続いている。例えば葬式のお手伝いは2日ばかりで手伝う。根本的な心のつながりというものだろうか。

- 「御馳走」という言葉を入れたい。奈良には海がないので、走り回っているニワトリを捕まえて、すき焼きにするのがお客さんに対する一番の御馳走だった。

- 御馳走を漢字で書くと、走り回ってお客様のためにおもてなしをするという意味がある。今は色々な食材が手に入るが、昔は住んでいるところの四方を駆けずり回って食材を集めて御馳走をしてお迎えするという心があった。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 奈良では御馳走というより「ごっつお」と言うのでは。方言のような表現の方が特別な意味があると思う。「1300年、人と人をつなげる奈良のごっつお」はどうか。

⇒委員：中島 弘子（奈良市農村生活研究グループ）

- 「ごちそう」と言うのが良い。美しい言葉を使った方が、聞いたときに気持ちもいい。

<委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 奈良に来て感じたことは、人の優しさが優れていること。京都は奥ゆかしさ、大阪は心の広さ、神戸は華やかさ、奈良は心の優しさだと思う。食を通じて人の優しさを伝える。生産者への感謝と、それを受けて作る料理。そうした言葉の交わりがあるといい。

⇒委員：尾崎 敦士（旬彩 ひより 代表）

- 「優しさ」は良い。関東の方がよく「奈良の人は優しい」とおっしゃる。道を聞いても何をしても優しいそうだ。それがもてなしにもつながるし、行動の根本になる。

<委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 現実の生産現場の立場からはどうか。生産者の生活の活性化も含めた地産地消なので、かけ離れてはいけない。

⇒委員：岩井 章人（奈良4Hクラブ副会長）

- 消費が進めば、生産者の意欲も上がる。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 地産地消としては生産と消費を拡大するということは外せない。食育とは違うところ。

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 「人の優しさが食をつなぐ」というイメージか。美味しかったかどうかを具体的に生産者に返すことによって、生産者が次に努力する形ができる。生産者が消費者の意見を聞けるような、食でつながるイメージが付くといい。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 「奈良の農林畜産物の生産と消費を拡大し、感謝と優しさでつなぐ地産地消を目指します」といった感じか。そこに文化や歴史が少し入れればいい。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 「つなぐ」というのは良い。つながったら生産者も料理人も消費者もお互いに活性化される。感謝や優しさが何によって促進されるのかに奈良らしさが入るといい。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 1300年の心を入れて「感謝と優しさ、1300年の心でつなぐ地産地消」のように歴史や文化もつなげていきたい。

＜委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- できることなら循環が欲しい。食べ物を作ることは、環境を作ること。震災が起きた後、地域がどれだけつながるか、なるべく小さい地域で循環した社会をつくれるかがテーマ。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 案③に「食と人の環」とあるが、「環をつなぐ」とすると循環の意味も入る。「感謝と優しさで環をつなぐ地産地消」になるか。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 何の環になるか、自然と文化か、人と自然か、何をつなぐことになるか。

＜事務局

- 1300年という数字が出てくると奈良市をイメージさせるので良い。もし、「まほろば」が引っかけられるようなら、「あをによし」という平城京を表す言葉もある。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- 1300年目の田植えというのも面白い。計画の中で1303回目とか1305回目とやっていくのもいいか。

⇒委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 「1400年目を目指します」というのもいいかもしれない。100年後を目指すのはいいこと。「感謝と優しさでつなぐ奈良の食文化」というのもいい。農業だけでは孤立した面が強いので、地域の経済の中に農業をしっかり取り込むという意味。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 奈良市の食文化として1300年の歴史と言うと、歴史的に続いてきた素晴らしい食文化を引き継いでいくという意味合いにならないか。「食を通じて感謝と優しさでつなぐ1300年の心」という感じか。

## ▼ 基本理念の柱（案）について

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

- 確実に実現させるのであれば、柱はかなり絞らないといけない。そうではなく、一般的なことを網羅するのであれば、ある程度のことを入れてもいい。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●基本理念の柱は、推進や促進という言葉があるので、どちらかという方針のようなものか。実現に向けてどうするかという意味に見える。

⇒事務局

●近い将来、促進計画を作るので、そこでより具体的な目標を立てることになる。掴みの段階なので、あまり堅い表現にせず、柔らかい表現でいいと思う。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●案①はよくありそうな表現で、確かに堅いかもしれない。案②は最近では流行っている表現。奈良のおもてなしというのがあっていい。

<委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●促進計画の作成を含めてタイムスケジュール的にはどのような流れになるか。

⇒事務局

●まず基本計画を打ち出して、半年ほどしてから促進計画の検討に入る。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●基本計画と促進計画は連携するものになるはず。この委員会では抽象的な話をすべきなのか、ある程度の実現性まで加味した具体的な議論をすべきなのか。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●柱を基本方針に変えて、次にそのための計画を立てていくほうがいい。

●基本理念の柱は基本方針ということで、これ自体が基本計画になるわけか。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●方針と計画では違う。方針は方向付けで、計画はそれに向かっていくための作業手順。我々が議論すべきは、方針レベルなのか、計画レベルなのか。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●事務局が言うところの基本計画は、基本方針のレベルになるのではないか。

⇒事務局

●基本方針に近いレベルである。

<委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●案②は分かりやすく、思いも入っていて良い。方針なので、あれもこれもと入れていくべきものは入れる方がいい。「伝える」「楽しむ」「もてなす」「つなげる」「広げる」「育てる」などのキーワードがいいかもしれない。

<委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

●地産地消と流通の発展、そして食育。その2つの他に本質的なことで何かないか。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

●ツーリズムを入れてほしい。それは落とせない。

⇒委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

●ツーリズムは情報発信的なもの。そうになると食育になる。

●これまであったものだけではなく、これから創るものも文化。今ではどこでも懐石料理があるが、世の中が発達していくとそれに合わせて新しい食文化ができていく。そういった新しく作るというものが入るといい。

⇒委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●「観光」というのは良い。「知る」「訪れる」「体験する」「感じる」を方針に入れるのはどうか。それから「感謝する」は食育に入ることになるか。

＜会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●奈良で作物を育てるとい話が要る。

⇒委員：中島 弘子（奈良市農村生活研究グループ）

●農地が荒れてきている。生産者が年寄りで耕す人がいなくなり、また田に水を引くのが不便。現時点が生き活きしないと、どれだけ地産地消と言っても広がっていかない。

●うちも休耕田にしていたが、市から市民農園を提案してもらった。自分たちだけでは知恵が回らないし、区画割や契約内容など不明な点も多い。土地を貸すことは大変なこと。

●今は多くの方々に来て使ってもらっている。畑に来る人にはリタイヤした人が増えており、皆さんの交流の場として人と人のつながりもそこで行われている。

●農地を貸すことについては、土地が売れたときに裁判沙汰になった家もあり、貸したがない。草が生えてもそのままという考えの人がたくさんいる。

⇒委員：岩井 章人（奈良4Hクラブ副会長）

●戦前から土地を借りている農家は小作権が発生して、土地を売る時は何割というのがあるようだ。最近借りた分についてはそういうものはない。

●土地の貸し借りは人の信頼。あの家に貸しておけば大丈夫という話が口コミのように伝わる。市の人が入ってもうまく話がまとまるとは限らない。

●生産者からすると、市民農園はあまりしてほしくない。自分たちで作ってしまうと、農家の商品が売れなくなる。なるべく消費を農家の方に向けてほしい。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

●市民農園も地産地消を進めるツール。農業を知れば地元の農産物も良くなる。

●地元のマーケットで、皆が欲しいと思うものを置いて活性化すればいい。年に1～2回、自分たちで作ったものを持ち寄って、品評会を遊びながらやる程度でもいい。

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●農業や農地を振興する上でどのような言葉があればいいか。例えば農地を「貸す」、「指導する」など、現場を活性化するような言葉が欲しい。

⇒委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

●消費者の感謝の言葉があれば、生産者の意欲につながる。

⇒事務局

●担い手を育成する上での体験という言葉はどうか。新規就農者を増やすきっかけとしての体験になるのではないか。

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

●地産地消計画は、条例なども変えてやっていくものではないのか。

⇒会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

●運動の一種。食育には法律があるが、食育運動のようなもの。

⇒事務局

●条例や規則、要綱などと必ずしもリンクさせなければならないものではない。基本計画ではあるがソフトな感じ。しかし、促進計画に向けて行動・アクションが付いてくる。

＜委員：石川 敬之（奈良県立大学地域創造学部准教授）

●奈良県産の農産物の消費を高めるためには、どのような行動が考えられるか。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- 地産地消マーケットやスーパーの地産地消コーナーのようなもの。それを増やして消費者が欲しいものを作るということをしていければいい。

＜委員：藤丸 正明（奈良町情報館館長・地域活性局代表）

- 生産者の利益があと1割大きくなるだけで変わる。農家の取り分が良くて2～4割だが、それを変えるためには、もっと劇的なことをしなければならない。
- JAは価格が安いがたくさん引き取ってくれる。飲食店が直接買い付けるものなども総合して農家の所得を上げることができれば、生産の面では成功すると思う。

⇒委員：辰巳 千嘉子（コープ自然派奈良理事長）

- コープ自然派奈良では、生産者が6割、生協の運営に3割、流通が1割でやっている。
- 奈良のものを使ったら格好良いという意識を作るためのもの。奈良の食材を使った料理が美味しいというイメージ作りをすることが大事。

## ▼ 次回に向けた課題

＜会長：塚本 幾代（奈良女子大学生生活環境学部教授）

- 次回は基本理念と基本方針を検討したい。次回までにご意見があれば、事務局までメールなどで連絡していただきたい。
- 委員の皆様から意見は、メールで一斉配信して頂きたい。それを見てまたアイデアが湧くかもしれない。

会議の経過を記載して、その相違ないことを証するため、ここに署名する。

会長 塚本 幾代

署名人 岩井 章人